

「遊々の森」における環境保全活動と森林学習の取組

岩手北部森林管理署 一般職員 ○塩谷智也
森林官 下條智人
森林技術指導官 小西光次

1. はじめに

安比高原は、岩手県北西部、標高約 900m に位置する高原である。ここにはブナ二次林やシバ草原が広がり、毎年多くの人々が自然観察を楽しみに訪れるなど地域の人々にとって大切な財産となっている。この安比高原のブナ二次林やシバ草原は、主に江戸時代より、牛馬の放牧や、浄法寺漆器の木地材、薪炭生産の場として地域住民に利用されることで、その景観が維持されてきた。しかし高度経済成長期以降、牛馬の放牧が減ったことでシバ草原の藪化が進み、かつての景観が徐々に失われていった(図 1)。

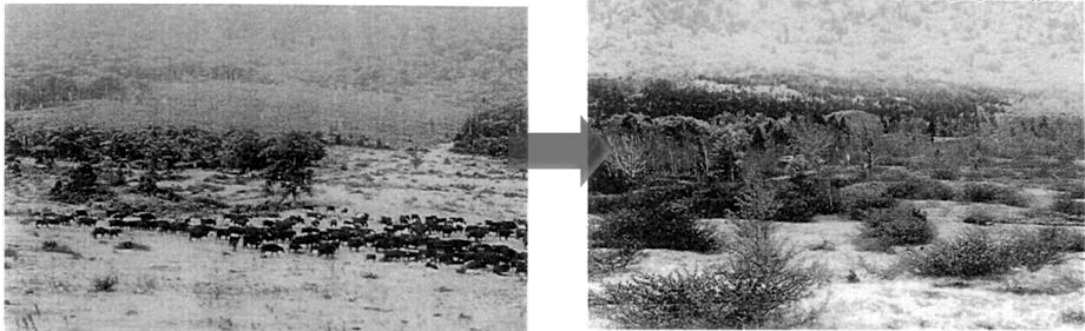


図 1 安比高原の景観の推移

こうした状況に対し地域住民から、「かつての安比高原の景観を取り戻し、その大切さを次世代に伝えていきたい」という要望が数多く寄せられた。これを受け平成 18 年度に当署は、安比高原を整備し環境学習の場として利用するために、八幡平市との間で安比岳国有林約 180ha を「あつぴ高原遊々の森」として協定を締結した。

そして以降 8 年間にわたり当署は、八幡平市、市民と協力して「あつぴ高原遊々の森」の環境保全活動に取り組むと共に、遊々の森を活用した森林環境学習を継続して開催してきた。今回は、これまでの遊々の森における環境保全活動と、当署の森林学習の取組みについて報告する。

2. 環境保全活動の活動内容と成果

協定締結当初の保全活動の主体は、当署と八幡平市、地域住民で組織された活動推進協議会であった。この活動推進協議会では、シバ草原を維持するために草原を覆うササやズミの刈払いや野焼きを年 3 回(春：約 1~2 日、夏約 1~2 日、秋：約 1 週間)行ってきた(図 2)。



図 2 シバ草原の刈払い

また自然観察や環境学習の場を整えるために、自然歩道や案内看板の設置も行ってきた（図3）。



図3 自然歩道と案内看板設置の様子

こうした活動の多くは市民参加型のボランティア活動として実施してきたが、平成24年に民間のボランティア団体「安比高原ふるさと倶楽部」が誕生して以降、保全活動の主体は市民へと移行してきている。

「安比高原ふるさと倶楽部」とは、地域住民やペンション・民宿オーナー、ホテル関係者が自主的に組織した民間団体である。現在ふるさと倶楽部では、独自に森林環境学習も実施しながら、これまで同様、季節毎に草原の刈払い・野焼きを行うほか、自然歩道の維持整備を行っている。また平成26年度には、安比高原の一部に馬を放牧してシバ草原を復元・保全する研究を行っている（図4）。



図4 馬を利用した草原復元研究

こうした保全活動に対して当署は、ふるさと倶楽部の運営委員の一員として活動計画の立案に助言を行うほか、季節の保全活動にも継続して参加することで、職員が丸となって協力している。

以上の保全活動により草原を覆うササやズミが除かれ、現在安比高原ではかつてのシバ草原が徐々に復元されつつある（図5）。また8年間にわたる継続的な保全活動は、平成26年度森林レクリエーション地域美化活動コンクールにおいて全国森林レクリエーション協会会長賞を授与されるなど、高い評価を受けている。



図5 現在の安比高原の様子

3. 森林学習の活動内容と成果

当署は、平成 26 年度に地元の小中学校の依頼を受けて実施した森林学習全 16 回（延べ 8 校、485 名が受講）のうち、「あっぴ高原遊々の森」を利用して 6 回（延べ 3 校、185 名が受講）を実施している。

その中で安代小学校 5 年生を対象に行った森林学習では、「安比の森の大切さを伝えよう」をテーマとして、森林学習を 5 回に分けて実施した。各 5 回のサブテーマは下記の通りであり、子供たちが森林に住む生物や森がもたらす恵みについて、まず教室での勉強で「知った」ことを、森林散策しながら実際に「見た」上で、「実験や体験」を通して理解を深め、最後に学んだことを「発表」することで、安比の森の大切さを他の人にも伝えられるようになることを狙いとしている。

- ・ 1 回目：安比の森林について知ろう … 「知る」
- ・ 2 回目：安比に住む生物や 森林がもたらす恵みを見てみよう … 「見る」
- ・ 3 回目：樹木の種類と用途を学ぼう
- ・ 4 回目：森林がもたらす恵みを確認しよう、安比の森を守ろう
- ・ 5 回目：森のエネルギーを使おう

具体的な授業内容としては、まず 1 回目は教室でオリエンテーションを行い、森林に住む生物や森が持つ働きについてスライドを用いた学習を行った。

続いて 2 回目では、ウォッチングビンゴというネイチャーゲームを実施した。ウォッチングビンゴのシートには、林内で見られる生き物の特徴（例えば花の色や種の形など）がそれぞれのマス目に書かれている（図 6）。シートに書かれた生き物を見つけてビンゴを完成させることで、子供たちは森にどんな生き物がいるのかを楽しみながら学んでいる。



図 6 ウォッチングビンゴシート

3 回目では、樹木について更に深く学んでもらうために子供樹木博士というゲームを実施した（図 7）。このゲームでは、まず林内のコースにある樹木の名前や特徴、用途について、説明を行った。子供たちは、教わった樹木を自分で見たり触ったりして覚え、最後にゴールにある標本を見てそれが何の樹木であるかを答えることで、学んだことを復習している。



図 7 子供樹木博士の様子

4回目では、森がもたらす恵みを確認するための実験を行った（例：気体検知管を用いた植物の二酸化炭素吸収実験）。また治山ダムを見学するとともに、草原の刈払いや間伐材を使った薪割り体験を行い（図8）、人が手を加えることで森や草原が守られていくことを子供たちは学んでいる。



図8 草原の草刈り体験と薪割り体験の様子

5回目では、焼き芋やミネストローネなどの料理を、4回目で刈り取った草や薪を使って行った（図9）。子供たちは、自分たちで森から得た材料を使ってたき火で暖を取ったり料理をしたりすることで、森のエネルギーが生活にとっても役に立つものであることを実感していた。



図9 草や薪を使った料理体験

以上5回の森林学習のまとめとして、子供たちはまず秋の学習発表会で家族や地域の方々に向けて、森林について学んだことをスライドや演劇で発表・表現しており（図10）、更には代表児童2名が全国の子供たちを集めて開催された学校の森・子供サミットに参加し、「安比の森を守ろう！」というテーマで発表している。全国の子供たちに安比高原の魅力や安比高原を守るために体験したことを伝えられるまでに至ったことで、本森林学習の狙いが達成できたのではないかと考えている。



図10 草原の草刈り体験の演劇

4. まとめ

長年の保全活動により現在安比高原は、徐々にかつての景観を取り戻しつつあり、またオキナグサ等の希少植物やヤナギランが群生する光景も見られるようになった。更には環境保全活動を通して森林学習の場を整えてきたことで、現在遊々の森では、岩手県内外の多様な団体により、多くの森林学習や自然観察会が実施されるようになった（図 11）。このように「あっぴ高原遊々の森」は、安比の自然の豊かさや、森がもたらす恵みを伝える場として大いに役立っている。

当署では、「あっぴ高原遊々の森」のほかにも身近な国有林を活用し、多くの森林学習を実施している（図 12）。今後ともこのように地域の要望に応えた取組みをよりいっそう推進することで、当署の組織目標である「地域にとって、あつて良かったと思われる森林管理署」を目指していきたいと考えている。



図 1 1 市民による森林学習の様子
みどりを守り育てる岩手県民会議
「自然世塾」



図 1 2 田山小学校 5・6 年生
「四角岳登山」